

# 特攻前 最後の本塁打

## 戦後70年 途絶えた球音 ③

日頃は無口だった男が、試合の流れを変えた。

1945年3月初旬、やがて特別攻撃隊員となる飛行士たちが、訓練中の佐賀県の自衛隊飛行場を開いた野球の対抗試合のことだ。世間では「敵性スポーツ」と呼ばれながらも、隊員たちのつかの間の娯楽として野球は許容されていた。

「オレもやるよ」と申し出たその男に「本当にできるのか」と、仲間がからかい半分に声をかけた。格納庫前の広い場所が始まった試合。劣勢で、遊撃からマウンドに上がった男の投球に目がを見張った。

## 甲子園中止 プロ2試合で召集

本塁打を打ち、ほぼ一人で試合をひっくり返した。小諸商(長野)の強打者で投手としても活躍した渡辺静の、最後の試合だった。戦友はその日まで彼の球歴を知らなかった。

甲子園出場の有資格者とされながら、41年の第27回大会は全国大会が中止された。渡辺も一校長から告げられ、皆と一緒に声をあげて泣いた。

45年6月末、渡辺は毛筆で「野球生活八年間 わが心 綴へてくれし 野球かな」と、野球部で1年後輩だった小林英次(90)は語る。



① 出撃を前に、慰問品の人形を手にした渡辺静(1945年6月)。渡辺静が出撃前に書きのこした手紙。「野球生活八年間 わが心 綴へてくれし 野球かな」 朝日軍 渡辺静 とある。いずれも中島正直さん提供



② 渡辺静が戦前に書いた手紙の複製。手紙には「野球生活八年間 わが心 綴へてくれし 野球かな」という言葉が書かれている。

「野球生活八年間 わが心 綴へてくれし 野球かな」と、遺書を記したため。特攻隊の基地だった鹿児島・知覧飛行場で6月6日の出撃直前、整備士に「座席は私の死に場所だから、手入れをたのむ」と声をかけたという。南へ、編隊で飛び去る写真が残る。知覧特攻平和会館(鹿児島南九州市)に、実家が98年に寄贈した愛用のバットが



小諸商野球部では渡辺静の辞世の句や写真などが入った額を遠征でも持ち歩く。選手を見守るかのようになっている。新井重治(現・八尾)を贈す」と全校生徒に演説した八尾中(大阪、現・八尾)の壺井重治、神戸一中(現・神戸)の島登夫……。特攻死した元球児が相次いだ。出撃前の事故死もある。40年の夏の甲子園に出場した北海道(北海道、現・北海)の剛腕投手、坪谷幸一は45年5月11日、鹿児島・第二国分基地から出撃の直前、援護の戦闘機に突っ込まれて死亡した。坪谷と同じ部隊にいた小川昇(92)は「一緒だった他の4人の出撃は延期され、終戦を迎えた。坪谷が助けたようなもの。あれだけ訓練して、なぜ一発勝負で突っ込まれるのか。その頃は特攻隊へは志願するのが当然だったが、本心は嫌だったと打ち明ける。



44年10月にフィリピン戦線から始まった特攻は、45年3月からの沖縄戦で拡大。特攻による死者は一説に5845人とされる。プロでノーヒットノーランを達成、出撃前のキャッチボールの逸話が映画「人間の條件」で描かれた。

### 特攻

死を前線とした特攻戦法には当初、異論があった。公刊戦史によれば1944年10月4日、陸軍で最初に特攻隊の編成を命じられた鈴木教導飛行師団長の今西六郎少将は、日誌に「常時編成しておく性質のものではない」と記したという。だが、戦況が悪化するなかフィリピン戦線で45年1月までに500機以上が特攻に投入され、沖縄戦では延べ3千機が出撃したとされる。本土決戦に備えてベテラン操縦士は温存され、飛行経験の少ない若者が主体となってきた。老朽化した旧式機に乗り出された。

小諸商では今、公式戦や遠征の際に、渡辺の写真や辞世の句を入れた額を持って行く。竹俣慎一(監督36)は選手に対し問いかける。「もし渡辺さんがもう一度プレー出来たら、どんな気持ちで試合に臨むだろう」 敬称略(編集委員・永井靖一、森島尚希)